

第一原則の発見

昭和 26 年、当時わたしの住んでいた東京都下八王子市に、教育委員会が生まれ、わたしは、その指導室に、主事として勤務することを命ぜられました。市内にある高校・中学・小学校を訪問して、授業を見、先生がたを指導し、助言を与えるのが仕事です。

こうして、わたしは、はじめて小学校教育の実際を、自分の目で見ることができるようになったのです。そこでわたしが、小学校の先生がたから訴えられた悩みというのは、「子どもたちの漢字の力が弱いこと」そのため、「社会科や理科の勉強さえまんぞくにできないこと」「これを解決するための、うまい漢字の指導法はないだろうか」ということだったのです。

わたしは、先生がたのこの悩みを解決してやろうと、考えた末の案が、いま、石井方式の「第一基本原則」となっている、「社会で、一般に漢字で書いていることばは、最初から漢字で書いて教えるべきである」という考えだったのです。わたしは、この考えを多くの先生がたに訴え、あるいは、勧めてみました。しかし、先生がたには、この考えは机上の空論としか考えられなかったようでした。だれひとりとして、実行してみようと申し出てくれる先生はいなかったのです。

発奮して小学校教師となる

たしかにわたしの考えは、机上の論にちがいません。わたしには、実際に小学生を指導した経験がないのですから……。しかし、自分の考えが正しいと信ずるわたしは、小学校の教師となり、実際に子どもを指導して、その正しいことを証明しようと考えようになりました。

昭和 27 年の新しい学年を迎えると、わたしは、せっせと市内の小学校の一年生の教室を見て回りました。指導主事ではなくて、指導され主事になったのです。こうしてわたしは、一年生を担当する準備を始めたのです。

帰宅すると、ピアノの練習も始めました。これは一年生の担任として、絶対に必要な技術なのですから……。幼稚園に通う長男と、三つになる長女と、バイエルの練習をいっしょに始めましたが、いくらがんばっても、子どもたちにだんだんと引き離されていく悲しさを、しみじみと味わったこともありました。

昭和28年4月、わが子の小学校入学とともに、わたしは、新宿区の淀橋第一小学校の教師となり、待望の一年生を受け持つことになりました。